
華氷姫 ~Marguerite~

保科 郁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華氷姫 ↗ Marguerite ↗

【Zコード】

Z9517C

【作者名】

保科 郁

【あらすじ】

華のようにも美しいけれど、氷のようにも表情のないお姫さま。
いつしか姫君は華氷姫はないおり、と呼ばれるようになりました。

昔々、ある王国にたいそう美しい姫君がありました。

雪のよつと純白の肌理細やかな肌、艶やかな紫がかつた黒髪に、
吸い込まれそうな紫紺の瞳。

そんな美しさと、姫が生まれた時に妻を亡くした事も関係してい
たのでしょ、王様は姫君をとてもとても大切に育てておりました。
その甲斐もあって、姫君は大きな怪我も病気もせずに健やかに育
つっていました。

……ただ一つ、表情がないことを除けば。

そう、姫君の表情は凍り付いたかのように動かなかつたのです。

華のよつと美しいけれど、氷のよつと表情のないお姫さま。
いつしか姫君は 華氷姫はなじおり、と呼ばれるようになりました。

でも姫君はとても美しかつたので、その事で姫君を悪く言う人は
誰もおりせんでした。民は皆、姫君が笑つたなら とても可愛いだ
ろうに……と、残念がりました。

王様は姫君の成長を間近にみていくので、残念さも一入でした。

そんな中 姫君はすくすくと育ち、六歳の誕生日を迎えた。
表情は相変わらずありません。

王様はついに我慢できなくなり家臣達に命令を下しました。姫君
を笑わせる事を。そして笑わせた者にはとても素晴らしい褒美をと
らす、とも明言しました。

家臣達は 王様と同じく姫君の笑顔を見たかつたのと、褒美をも
らえるのとで挙つて参加しました。

けれど、誰一人として姫君を笑わせることはできなかつたのです。それに苛立つた王様は『そなた達が本氣にならないから姫が笑えないのだ。次に笑わせる事ができなければ、死刑に処す!』と言いました。

それを聞いた家臣達は、恐れ戦おののきました。王様が本氣で言つてゐる事が分かつたからです。

家臣達は死に物狂いで姫君を笑わせようとした。けれど、その必死な行動にも関わらず、姫君の表情はぴくりとも動きません。王様は怒りで顔が真っ赤になつてきています。家臣達の顔は逆に青ざめ、ガタガタと震えている者もいました。

王様はそんな家臣達を尻目に、すぐつと立ち上がり、近くの付き人に処刑人を呼びに行くよう命令しました。付き人は戸惑いましたが、王様に一睨みされ慌てて部屋を飛び出していきます。

そんな中、一部始終を静かに見つめていた大臣は、近くに居た医師に、そつとある事を提案しました。医師は驚き、止めるよう言いましたが、彼の意志は堅く聞く耳を持ちませんでした。結局、医師は押し切られる形で、その提案を了承せざるをえませんでした。

そうこうしているうちに、付き人が処刑人を連れて戻つてきました。処刑人は身の丈二メートル近く、筋肉が盛り上がつた体つきをしています。頭には黒い頭巾を被つていました。

その黒い頭巾は、処刑人が誰かを特定させない為のものです。けれど顔が見えないせいで、余計に恐ろしさが感じられました。処刑人の手には黒光りする鉈^{なた}が握られていました。鉈は異様に大きく、処刑人の肩ほどまであります。けれど、処刑人は重さなど感じていなかの如く、^{ひざまづ}軽々と持ち歩いてきます。

処刑人が王様の前に跪き、いよいよ処刑の命令が下されようとしたその時、大臣の声が広間に響き渡りました。

『お待ち下さい王様。私にとても素晴らしい案がござります。一度挑戦させていただけないでしょうか?』

王様は頭に血が上つていたので許可を済りました。けれど大臣の自信ありげな、落ち着いた顔をみて思い直しました。

『よからう。やってみるがよい』

皆が緊張して見守る中、大臣は姫君の前まで進み出て一言発しました。その言葉はこんな緊迫した空気の中でも、思わず笑みがこぼれてしまつようなものでした。

……けれど姫君は笑いませんでした。

王様はもう怒りを抑える事ができず、ぶるぶる震えていました。そして興奮のままに声を荒げ、大臣の処刑を命じます。

その命を受けた処刑人は、それが仕事なので 迷いなく大臣の傍に進んでいきました。大臣はただ静かに、喚くことも命乞いもせず、

処刑人が近づいてくるのを見つめています。その姿はとても落ち着き払っています。

処刑人がゆっくりと鉈を振り上げました。広間に居る全ての家臣は、次の凄惨な状況を想像し目を反らしました。けれど王様と姫君、医師だけはその様子を見つめています。

処刑人の腕が振り下ろされ、鈍い斬首音と共に、あっけなく大臣は処刑されてしまいました。悲鳴の一つも上げませんでした。
しん……と静まり返った広間の中、大臣の首が落ち、転がる音だけが響いていました。

首はゆっくり転がると、姫君の前で止まりました。姫君はそれをじっと見つめています。表情は変わりません。

広間は大臣の血で真っ赤に染まりました。医師はそれを悲痛な面持ちで見てします。周りにいる家臣達は、次は己の番だ……と、がたがた震えだしていました。逃げ出したくとも 足が恐怖で固まり、動かすこともできない者が殆どでした。

王様はその様子を気にすることもなく、続いて処刑を命じようとします。そこを今度は医師が遮りました。

『王様。笑えないだけならともかく、この凄惨な状況で表情を動かさないのは 有り得ざる事です。姫君が笑えない、表情を変えられないのは、もしかしたら病気なのかもしません。私に治療を任せていただけないでしようか?』

その言葉に、王様は姫君の方を見ました。姫君は無表情のまま、未だに大臣の頭を見つめています。

確かにこの状況で悲鳴一つ、眉一つ動かさないのは異状です。そう感じた王様は許可を出すことにしました。けれど、一つだけ条件をつけました。

五年間です。それが過ぎても姫君に表情が出なかつたならば、医

師も医師の家族も、処刑を覚悟しなければならないとの事でした。

姫君の病気は、今まで見たことがない症例で、治療がとても難しい事は想像ができます。

医師はとても悩みました。自分はともかく家族を巻き込みたくはなかったのです。

でもこの条件を飲まなければ、王様は 家臣達を躊躇たあらいなく処刑してしまってしよう。それだけは何としても止めなければなりません。……死んでしまった大臣の為にも。

そうです。大臣はこの流れにもつていく為に自分を犠牲にしたのでした。

あの時 王様は怒りで頭に血が上っていて、冷静な判断ができる状態ではありませんでした。あのままだつたら、意見したとしても聞く耳を持つたはずがありません。

そこで大臣は己の死により 王様の怒りを静めると共に、姫君の異状を知らしめたのです。後の事を医師に託して……。

ここで逃げ出したなら、大臣の死が無駄になってしまいます。それ以前に 自分に全てを託して亡くなつた彼に申し訳が立ちません。医師はついに心を決めました。

『必ずや、五年の間に治してみせましょウ』

王様はその言葉を聞くと大層 喜び、満足気に頷きました。もちろん家臣達の処刑は中止です。

『必要な物があれば遠慮なく申すがよい。治療にかかる費用、五年間の生活費も気にするでないぞ』

そう医師に言い渡すと、王様は姫を連れだち 『機嫌のまま退室しました。

家臣達は皆、ほっと胸をなで降ろしました。ただ 医師だけは深く思い悩んでいました。

例え離婚したとしても 違う国に引っ越しをさせたとしても、王様は家族を見つけだすでしょう。

医師は確かに心を決めました。けれど、それはその選択しかできなかつたというだけなのです。あの時、最善だつたと思われる選択。それは家族を危険に晒すもので……。

医師は悲痛な面持ちのまま帰路につきました。

家に帰るとすぐ、妻に今の状況を包み隠さず話しました。

医師は辛そうに話し終え、妻を見ました。

『 もう…』

妻はそう言つただけでした。医師を見つめる瞳はとても穏やかです。責める事も悲観して泣き崩れる事もありません。

医師は不思議に思いました。

『お前はどうして私を責めないんだ。怨みに思つていらないのか?』

妻は静かに微笑みます。

『あなたのした事ですから、それが最善の策だつたのでしょうか。あなたと生涯を共にする覚悟はできております。それに、あと五年もあるではないですか。まだ処刑されると決まつた訳ではないのだし、やれることをやつましょ!』

医師はその妻の言葉に涙しました。そして、五年の間に必ずや治療法を見つけよう、と更に強く決心しました。

姫君の為に。死んでしまった大臣の為に。そしてなにより、この掛け替えのない家族の為に。。

それからの医師は、知り合いに協力してもらい、姫君の症例に似た病気がないか探し始めました。過去にあつた病気を記した書物を調べます。国の歴史は古く、その数は数千万にも上りました。妻も率先して手伝いましたが、その数はあまりにも多く、調べ終わるのに長い年月、二年程もかかりました。

もちろん医師はその間も、効果がありそうな治療を続けていました。顔面マッサージや食事療法、思いつく限りのことを行ないました。

それらの事は姫君の症状を良くなしませんでした。けれど、効果が出るかも分からない薬を使用する訳にはいきません。もし焦つて使用して、取り返しのつかない事になつては大変です。

治療は慎重に慎重を重ね、進められました。その為、書物を調べ終えるまで薬を使う事はできなかつたのです。

医者は調べ上げた膨大な情報の中で、治療に使えそうな薬剤を選び出しました。医師は寝る間も惜しんで治療法を考え、薬を配合します。ああでもない、こうでもないと試行錯誤を繰り返し……けれど、結果は芳しくありませんでした。

何度も失敗を重ね結果が出ないまま、無常にも月日は流れています。その事もあり、医師は度々挫けそうになりました。

けれどそんな時は、決まって妻が一言声をかけてくれました。それは慰めであつたり、励ましあつたり……ただ、一緒にいるだけだつたりしました。その度に医者はまだ頑張ろう、やつていこうと思えたのです。

諦めてしまつたら、そこで全ては終わつてしまふのですから……。医師は心を必死で奮い立たせ、姫君の治療を続けました。

期日までの年月はあつといつ間に過ぎていきました。そして、その年月で医師が出した結論は“この国の医療では治せない”といつ、あまりにも残酷なものでした。

過去の資料から選んだ薬は全く効きませんでした。そして、従来の治療法でも効果は得られなかつたのです。一から違う治療を作り出すには、もう時間がなさ過ぎました。

医師は限界まで頑張り続けましたが、努力も空しく 期限の一週間前になってしましました。

医師夫婦はすでに、処刑される覚悟はできていました。でも一つだけ心残りがあります。それは今年、十三歳になる子供の事です。自分達に死ぬ覚悟ができていても、子供には死んでほしくない と思うのが親心なのです。

一人は子供の為に知恵を絞りました。引っ越しをしても、誰かに引き取つても王様は見逃してはくれないでしょう。だから、それ以外の方法を考えなくてはならないのです。

二人は考えに考え、もうこれしかない という方法に辿り着きました。王様に見つからない方法 それは、人身売買です。

この国はかなり裕福な方でしたけれど、やはり一部の人々は貧困に苦しんでいました。その人達は生活に苦しんだ末、泣く泣く我が子を手放すのです。僅かばかりの金銭と引き換えに……。

引き取られた子供達の行き着く先は様々です。肉体労働の工場や屋敷への奉公、逆に大富豪に引き取られ優雅な生活を送れる事もあります。

子供を引き渡す理由は金銭欲しさが殆どですが、中には【上手くすれば今よりいい生活ができるかもしない】と、一妻いわいの望みに賭ける親もいました。

医師夫婦もその望みに賭けることにしたのです。それに この経路ならば、王様が見つけることはできない筈です。

医師はさつそく 人買いである商人と内密に連絡をつけ、引き渡し場所を決めました。

もちろん子供は嫌がりました。「一緒に逃げよう!」そう言いましたが、そんな事をすれば王様に見つかってしまいます。医師夫婦は子供をなだめすかし、それが無理だと分かると 睡眠薬を飲ませました。

眠つてしまつた子供を抱き締め、二人は静かに涙しました。この子の未来に どうか、どうか幸がありますよう……医師夫婦は切に願います。

暫くすると 一人は涙を拭き、行動を始めました。医師は人目にふれても自分と分からぬよう 変装をしだします。灰色の外衣に黒縁の眼鏡、焦茶の帽子を目深に被りました。

その間に妻は子供の服を着替えさせました。あまり質の良い服だと商人に不審がられるのです。疑われるだけならまだしも、引き取りを拒まれでもしたら 子供の未来が潰^{つい}えてしまします。

服を着せ終えた妻は、子供の長い髪を綺麗に梳かします。殊更^{じよがい}つくりと……別れを惜しむように。

それでも刻一刻と、約束の時間は近付いてきます。妻は震える手で 医師に子供を渡します。そして名残惜し氣に頬を撫でました。目はまだ潤んでいましたが、もう 泣く事はありませんでした。

医師は子供を抱き上げると静かに家を後にします。外は冷たい木枯らしが吹き荒れています。まるで夫婦の心情を表わすかのようになります。

約束の場所に着くと、商人はすでに佇んでいました。隣には質素

で、どこにあるような幌馬車が停まっています。

商人はすぐ医師に気付き、ゆっくり近付いてきました。見た目は人買いにも関わらず、有りふれた恰好をした普通のおじさんでした。町ですれ違つたとしても違和感はないでしょう。

田線で問う商人に、医師は額き返します。

『ちょっとお顔を拝見……』

覗き込んできた商人に、とっさに体を引ひきとし、けれど医師はぐつと堪えました。これから引き渡すのに、避けては不審に思われてしまします。

『ほつ……これは美しいお子さんで、この容姿ならいい所に引き取られますよ』

商人は嬉しそうに微笑みました。久々のよい取り引に、とても満足したようです。

『……どうか、どうか うちの子を宜しくお願ひ致します』

『言つても詮ない事と知りつつも、医師はつい声を出していました。その顔は苦渋に満ちています。

『大丈夫。うちは良心的ですから ちゃんと良い所を紹介します。ご安心ください』

人身売買に良心的もないのですが、何故か商人は胸を張つて答えました。商人は医師を馬車の方に促すと、子供を乗せるよう言いました。

医師は躊躇^{ためら}いながらも、震える手で我が子を座席に横たえました。

子供は薬が効いていいのか、身動きひとつせず眠っています。起きていたらきっと泣き喚いていた事でしょう。医師は最後にそっと頭を撫でてから、手を放しました。

静かに見守っていた商人は、頃合いを見て懐から袋を取り出し医師に手渡しました。

『とても良いお手せんを頂きましたので、これからは上乗せ分です』

更に、さりとてより少し小さめの袋を上に乗せました。医師は無言でそれらを受け取りました。

商人は医師に一礼をすると、馬車に乗り込み、闇の中へと姿を消しました。

医師はそれをただ静かに、まばた瞬きもせずに見送ります。袋を持った手は小刻みに震えていました。

馬車が見えなくなると医師はすぐに踵きびすを返しました。いつまでもここにいると、馬車の後を追つて子供を取り戻しに行きそつたからです。

家に戻ると、妻は沈んだ面持ちで椅子に座つていました。自分達で手放したとはいえ、やはり子供と別れるのは辛いものです。しかも自分達は明日、死んでしまうのですから。

自分で妻を巻き込んでしまった医師は、その事をとても申し訳なく思い、妻にも逃亡を何度も薦めていました。けれど妻は頑として首を縦に振りませんでした。

実際問題 子供はともかく、妻が逃亡しじよつとするのは無理がありました。でも、妻が頷かなかつたのはそれが理由ではありません。医師はとても辛そうな、泣きだしそうな表情で妻を見つめています。その後悔でいっぱいの顔に、妻は微笑み返しました。

『前に一度 言つたでしょう？ あなたと生涯を共にする覚悟はできています、と。私は自分の意志でここに残つてゐるのです。だから、そんな顔をしないでください』

そう、静かに言い……

『それにあなたは仕事に夢中になると、食事も睡眠もとらないじゃないですか。そんな人を一人になんかできませんよ』

……と続け、朗らかに笑いました。

医師は返す言葉もありませんでした。医師は自分でも分かってい

るのですが、夢中になるとつい忘れてしまいます。医師自身が不養生で寝込んでいては、患者を診ることもできません。妻はその事をよく理解していました。今までずっと、医師のそんな所を、さり気なく補つてきました。妻がいなければ今の医師はなかつたでしょう。

医師はその事でも妻にとても感謝していて、死なせたくはなかつたのですが、妻の意志はあまりにも堅く、どうにもできなかつたのです。

『そうだな……今の私がいるのはお前のおかげだ。今までついて来てくれてありがとう』

医師は心からの言葉を、今まで思つていても、口に出すことのなかつた事を言いました。

『どういたしまして』

妻は微笑みました。その笑顔はとても晴れやかで、妻に一遍足りとも不満がないのを表しているようでした。

その日、二人は明け方まで、今まであつたを語り合いました。付き合いだした頃、新婚生活、子供ができた時の感動……。今まで不平不満も喧嘩をした事も、幾度となくありましたが、今思い出せるのは温かい記憶ばかりでした。

二人は人生最後の時を、ゆつたりと落ち着いて過ごしました。

翌日、王様は医師夫婦の死刑を淡々と行いました。

家臣達は色々と言いたい事もありましたが、沈黙を守りました。

抗議すれば、処刑されるかもしれない恐怖もありましたが、この事

以外で 王様はとても優秀な国王だったからです。国を治める事はもちろん、外交にも武力においてもです。

王様がいなければ、土地が裕福で、位置的に外交に向いているこの国は すぐ近隣の諸国に攻め滅ぼされていました。

そんな事もあり、誰も王様を諫める事ができなかったのです。

医師の治療で姫君が笑うことはなかった為、王様は次の手を考えました。医療では無理だったので 今度は呪術の専門家を募ることにしました。

もちろん期限は五年と言い渡して募集をしましたが、参加者は後を絶ちませんでした。それは王様の言つ褒美がとても素晴らしい事だったのと、五年間の生活費・雑費が王様持ちだったからでしょう。王様は沢山の参加者の中から一人の男を選び出しました。その男は黒いフードを日深に被り、周囲に暗い雰囲気を漂わせていて見るからに怪しい者でした。けれど、評判はそれなりに良い者でもありました。

男は深く被つたフードの中から ぐぐもつた低い声で王様に御礼を述べました。周りの家臣達は男に不気味な恐さを感じましたが、王様は気にする様子もなく「精進するよう」「とだけ言つと広間を退室しました。

男はその日からさつそく準備を始めました。様々な御香や怪しげな道具を、次々とどこからか調達してきました。そして材料の準備が整つと王様に広間の使用許可をもらい、何種類もの御香を焚き不思議な紋様を描きだしました。

部屋は御香の煙で段々と白く、描かれた紋様で怪しい雰囲気を醸し出していきました。部屋の隅々にまで紋様を描くと、男はやっと手を止めました。その紋様は 人の手で書かれたとは思えない程、精密で纖細なものでした。

王様と家臣達はそれを見て評判は確かだつた と心から納得し、称賛のため息をつきました。それ程 描かれた紋様は芸術的で素晴らしいのです。

男は他にも細々した物を用意してから、姫君を広間に招きました。

姫君が到着すると、男は優雅に部屋の中心まで誘導しました。そこは紋様の中心になつていていた所でした。

姫君をそこに座らせ、更に紋様を書き足し 準備が整うと、男はおもむろに呪文を唱え始めました。

男の呪文を唱える声は、初日に返事をした時のぐぐもつた声とは全く違い、とても透き通つたものでした。王様達はさらに感心します。

部屋は薄白い煙で充満し、怪しいとも 莊厳とも取れるような雰囲気を醸し出していました。

その中で、男の厳かで透き通つたな聲音だけが辺りに響いています。皆は男が呪文を唱えおわるまで、ただ静かに 声も出せず神妙に聞いていました。それは姫君であつても変わりませんでした。

数十分後……。静かになつた広間で、皆はほんのりと笑顔を浮かべ合っていました。

ただ一人……姫君を除いて。

王様は落胆しました。けれど、これだけ素晴らしい呪術なら姫君を治せるかもしない、と希望も持ちました。王様は今後も更に精進するよう言つと、姫君を伴い部屋を退室していきました。

それから男は御香を変え、道具を変え、聲音すら変えて術を行いました。それでも姫君の表情が変わることはありません。男は当然のごとく、日々 憔悴していきました。

そして三年の月日が流れた時、男はあまりにも成果が出ない事に耐え切れず 逃げ出そうとしました。けれど王様がそれを許すはずはありません。

男はすぐに捕らえられ、帰らぬ人となつてしまいました。

この頃から国民は姫君を不気味に思うようになりました。あまりにも表情がなく、感情も見受けられなかつたからです。顔立ちが綺麗なのが、不気味さに拍車をかけていたのかもしれません。そのせいで陰口をたたく人も現れ、王様の横暴な処刑の事もあり國中は段々暗い雰囲気に包まれていきました。

そんな中でも王様は治療を諦めようとしませんでした。今までと同じように、王様の行動を止められる者もいませんでした。

王様は次の治療を行う人は、女性にしようと考えました。姫君も年頃なので、男性よりも女性の方が打ち解けやすいだらうと思つたのです。

王様は、また國中から希望者を募りました。けれど今度は誰も希望する人はいませんでした。それもその筈、姫君に良い感情を持つ人が殆どいなかつたからです。逆に非難する人ばかりでした。

王様が困つていると一人の女性が名乗りを上げました。その女性は異国から移住して來たばかりで、姫君にあまり偏見を持つてはいませんでした。

王様は喜んでその女性をお城に招きました。女性は医学の心得は全くありませんでしたが、女性としての心得は、ぱつちりでした。次の日から女性は姫君に淑女としての嗜みや楽しさを教えていました。

可愛い服や煌びやかなアクセサリー、綺麗な花束など、姫君の周りは華やかな物で埋め尽くされていきました。

でも相変わらず姫君の顔に表情は現れません。女性は段々、姫君

に不気味さを感じてきました。どんな事をしても表情が変わらないのですから、恐れを抱くなという方が無理なのかもしません。

けれど女性は頑張りました。お城での暮らしは何不自由なく豪奢かつ華やかなもので、女性はこの生活を捨てるのが惜しかったのです。

姫を着飾り薄化粧はいじやくを施し 礼儀作法れいぎさくほうもたたき込んで、誰も適わないくらいの淑女に仕立てあげました。それは生前の王妃様 姫君の母に生き写しで、王様は非常に喜びましたけれど、姫君には相変わらず表情がありませんでした。

美しいが故に、表情が無いその姿はまるで無機質な人形のようでした。

それを間近でずっと見てきた女性は ついに姫君の不気味さに耐え切れず、傍に居たくないとまで思うようになりました。

女性は一年も経たずに逃げ出そうとしました。けれど すぐ兵士に捕らえられてしまい、逃げられないと分かると血ぢら命を絶ちました。

た。

誰にも姫君を治す事ができなかつたことに、王様は大いに嘆き悲しみました。姫君を治すことはもう無理なのではないか……と、绝望的な気分に陥ります。

そんな中、王様はある医者の噂おちいを聞きつけました。その人物は薬を使うでも術を使うでもなく、多くの人を助けたというのです。王様は嬉々としてその人物を呼び出しました。

城に招かれた医者を見て王様は驚きました。考えていたよりも随分と若い青年だつたからです。青年というよりも まだ少年を抜け切つていないう位、という方が合っているかもしません。姫君より

少し上か、同じ位の年に見えました。

それに、その医者の後ろにも同じ年頃の少女が控えているのです。少女はきっと助手か何かなのでしょう。それにしても一人の年齢は医療を行う者として いささか若過ぎるものでした。

王様は小さくため息をつきました。評判の噂は嘘……とまではいかなくとも、過大評価だったと思ったのです。だから王様はあまり期待せず医者に尋ねました。

『そなたは薬や術を使わずに治療をすると聞いたのだが、一体どのよつな事をするのだ?』

『はい、王様。私は患者の顔色や普段の行動から どんな病気がを判断し、食事や生活習慣・環境などを変えて治療を施しております』

年齢の割にとても落ちつき しつかりとした医者の説明に、王様はさつさまでの考えを少し改めることにしました。

『……ほつ。では私が今どんな状態が診察してもうまいか?』

医者は領き王様の近くに寄る許可を得ると、手や身体を触診し顔色や表情を観察しました。その眼差しはとても鋭く、勇猛な武将と知られている王様でも少したじろぐ位のものでした。

しばらくすると青年は診察結果を淀みなく話しました。それはいつも王様が悩まされている事 例えば、頭痛や不眠など を言いか当てるものでした。

王様は これ程までに当たるとは思つておらず、とても驚き 感心しました。そして姫君をさつそく診てもらおう、と広間まで呼び出します。

姫君が現れると、医者とその助手は少し身動きしました。姫君はかなり痩せ細つていたのです。けれどその素晴らしい美貌のせいか、見苦しくはありません。姫君は皆が見守る中、ふらふらと危なっかしく席につきました。

医者は先ほど王様にしたように姫君にも診察をしました。姫君は嫌がる様子もなく、医者のする事を受け入れています。王様よりも長く診察した後、医者は静かに後ろに下がりました。

診察が終わつたと見て、王様は勢い込んで尋ねました。

『それで……姫はどんな状態なのだ?』

医者は難しい顔をして押し黙つていましたが、王様の質問に答えないわけにもいかず口を開きました。

『残念ながら今は、何とも判断しかねます。けれど、知識と技術を活かして、姫君の治療に全力を尽くさせていただきます』

王様は不安になりながらも了承しました。もう他に手はなく、駄目で元々だと諦め気分になつていたからかもしません。王様は常の「」とく、五年の期日だけを言い渡すと広間を後にしました。

医者はまず侍女に姫君の食事や普段の生活・行動などを尋ねまわりました。表情のこともあります、姫君があまりにも痩せていたのが気になつたのです。

すると驚く事に、食事は穀物や肉を殆ど摂らず、果物だけで、生活も多半が自分の部屋で過ごし、外にはめつたに出ないといつことでした。どうりで、あんなに瘦せていて、肌が青白い訳です。このままで倒れてしまふと思つた医者は、まず食事を何とかしようと考えました。

最初は消化のよい粥や汁物から少しづつ。それが食べれるようになつたら、その後は姫君の身体に合わせて量を増やしたり固形物にしたりしていきました。姫君は不思議と抵抗する訳でもなく、医者

の通りに食事を行いました。

その甲斐あって一年後には、姫君の体は丸い曲線を描いた女性らしい体型になっていました。

それでも同じ年代の女性より痩せていたのですが、健康を損なう程ではないので、医者はそれ以上を強要しませんでした。

姫君が健康的な体型になると、医者は散歩に誘うようになります。無理して運動する必要はありませんが、日の光りに全く当たらなければ体に悪いと思つたのです。姫君は嫌がるかと思われましたが特に何も言わずに誘いを受けました。

医者は姫君の体調に合わせてゆっくり ゆっくり歩きます。姫君はあまり外に出ていなかつた為か周囲をじっと見ていました。もちろん姫君は無表情だし、会話もほとんどありませんでしたが 医者は気にしませんでした。

陽だまりの中で数分間 庭を歩き、姫君の血色が良くなつたのを確認すると 医者は部屋に戻ることにしました。さり気なく姫君を部屋に促します。まだ初日ですし、姫君が疲れ過ぎないように配慮したのです。一人は庭に出たのと同時にゆっくり時間をかけ、部屋に戻りました。

部屋に着き、医者が姫君の為に扉を開けようと手を伸ばすと中から侍女達の声が聞こえきました。侍女達は姫君が居ないのをいい事に、好き勝手に無駄口をたたいていました。それは主に姫君の中傷でした。

表情がなくて気持ち悪い
いつも無言で何を考えているか解らない
感情がまるでない人形のようだ

医者は思わず眉をひそめていました。侍女達は扉の向こうに姫君

がいるとも思わず、聞くに耐えないお喋りをかしましく続けています。

話し声はそれ程 大きくありませんでしたが小さいとも言えず、部屋の外からでも充分聞こえてるものでした。隣にいる姫君にももちろん聞こえているはずです。医者は恐る恐る隣を窺いました。

医者の予想に反して、姫君は ただ静かに佇んでいただけでした。表情の変化は全く見られません。けれど、ショックを受けていない筈が無いのです。医者は姫君を、庭の近くにあるテラスに誘いました。

再び庭に戻り噴水が見えるテーブルにつくと、医者は助手にお茶を頼みました。姫君は膝上に揃えた手を じつ、と見つめているだけ さつきから一言も言葉を漏らしてはいませんでした。

助手は紅茶とお茶受けの用意を手早く終わらせ、静かにその場を下がりました。姫君は相変わらず手を見つめています。医者がお茶を勧めても飲もうとしません。

医者がどうしようか悩んでいると、とても……とても小さな 今にも消え入りそうな声で姫君は呟きました。

『…………どうして、私は…………こんなのでじょ……』

その顔は表情もなく、声にも抑揚はありませんでしたが 何故だかとても悲しみに満ちた聲音でした。医者には、姫君が今にも泣いてしまったに感じられました。

きっと侍女達は姫君が小さい頃から、似たような話をしていたのでしょうか。表では“可愛らしい”と讃め、姫君の居ない裏でこつそりと。

けれど いくら侍女達がそれを隠し 仕事を全うしていくも、気持ちは態度に出てしまうものです。侍女の態度はいつしか、淡々としたものになつていったのでしょう。それこそ、幼い姫君が気付いてしまう程あからさまに。

姫君も自分が異常なことは分かつていたので、侍女達に反論することなど到底 考えられませんでした。それで姫君は、侍女達の中傷を当然の事だと受け止め ずっと自分を責め続けていたのです。

小さな子供が冷たい環境の中で過いした事を思い、医者はいたたまれない気持ちになりました。

姫君は身動きもせず手を見つめたままでいます。どうやら医者に尋ねた訳ではなく独り言のようでした。それでも医者は自分の思いを口に乗せました。

『確かに貴女は他の方とは違っています。でもそれは人それぞれ違う所があるようなもので、変なのではありませんよ。それに表情が出来ないのは貴女のせいではないのですから……貴女が気に病む必要はありません。貴女はそのままで良いのです』

『……言つと医者は一円 言葉を止め姫君に円線を向けました。姫君はもう俯いてはおらず 医者の方を見ていました。医者は円元を和ませ 更に言葉を続けます。

『……ただ、もう少ししふくよかになられた方が良いかもしませんね。その方がもっとお綺麗に見えますし』

そう締め括ると医者は姫君に優しく微笑みかけました。

姫君は目を見張り と言つても瞼^{まぶた}が少し動いただけでしたが 医者を凝視しました。今まで表情がないのを変だと言われた事はあつても、普通だと言われた事はなかつたからです。それは王様である、実の父親であつてもそつでした。

思えば医者は姫君に対して笑顔を強要したりはしませんでした。食事や生活などは改善されましたが、それはあくまでも姫君の体調を気遣つての事で 笑わせる為のものではありません。

姫君が医者を見ると彼は紅茶を飲んでいた手を止め、穏やかに微笑み返してきました。姫君はさっと顔を反らしてしまいました。どう反応すればいいのか分からなかつたのです。

姫君は何故だか落ち着かない気持ちのまま、その穏やかな時間を過ごしました。

次の日から姫君付きの侍女は 医者の助手に代わりました。一人で世話をするのは大変な事なのですが、助手はなんなくこなしていました。もちろん、姫君を中傷したりもしませんでした。

姫君はやつとのびのびと過ごせる様になりました。もちろんすぐにはそうなつた訳ではありません。医者や助手が常に普通に接していくついたからです。そのおかげで姫君は緊張する事が段々と減つていきました。

心の負担も少くなつたからか行動にも変化がみられました。医者に誘われなくとも 自ら進んで外に出るようにもなりました。

表情が出ることとは未だにありませんでしたが、姫君はゆつたりとした時間を過ごしていました。

けれどそれとは別に、姫君は医者を避けたいような気持ちになつていきました。もちろんそれは、医者が嫌いだという訳ではありません。

一緒に過ごす分にはとても居心地が良いのですが、ふとした瞬間、何故か気持ちが落ち着かない事がありました。

それは診察での触診中だつたり、ときたま微笑みかけられたりする時だつたりしました。

姫君は顔に表情が出ないせいか、傍から見ると医者を嫌い、避けているようにも見えました。

医者はあまりにも露骨に避けられるので、自分の接し方が悪かったのだろうか、と悩みました。男の自分には分からぬ事なのかもしないと思い、助手にも相談しました。

助手には、姫君が医者を嫌っているとは思えませんでした。寧ろ好いているのではないかと感じていました。けれどその事を医者に伝える気はありませんでした。

助手も医者の事が好きだったからです。助手が見た所、医者も姫君の事を気にしていました。もし助手が姫君の気持ちを伝えたら、一人の恋は実つてしまふかもしません。

『私には解りかねます……。姫様のご様子、何かおかしかつたでしょうか?』

一人が恋人同士になるなんて到底、我慢できなかつた助手は、しらを切ることにしました。告白したもののがえなく玉砕していました。けれど、医者への気持ちは変わらなかつたのです。

助手にはそう言われもの、医者は避けられているようにしか思えませんでした。どうしたらしいのか、と頭を悩みながら庭を歩きます。そのせいか、医者は普段は行かない、庭の奥深くまで入り込んでしまいました。

医者はすぐにお城へ戻りましたが、特に急ぎの用もない事

を思い出し、少し散策してみよつと考えました。わつと氣分転換がしたかつたのでしょう。

そのまま暫く進んでいくと、周囲は段々 草木が生い茂る場所になつていきました。茂みが肩位の高さになり、医者もさすがに引き替えそうかと思い出した時、急に視界が開けました。

そこは、ちょっととした部屋位の野原が広がっていました。その野原に白い花弁の 小さくて可愛いらしい花が咲き誇っていました。医者はしばらくそこに佇み、花が風にそよいでいるのを見ていました。医者はしばらくそこに佇み、花が風にそよいでいるのを見ていました。なんだか ほんわかと心が癒されます。

ふと、この可愛らしいお花畠を姫君にも見てもらいたくなり、医者はさつそくお城に足を向けました。その歩調はどうしてだか分からりませんが、気持ち急ぎ足になつっていました。

お城に戻った医者は姫君を訪ね、散歩に誘いました。姫君は落ち着かなさげに目線を彷徨わせながらも、医者の誘いを受けました。医者は不審な動きをされながらも、断られなかつた事に胸を撫で下ろしました。

いつものように 姫君に歩調を合わせて、医者はゆっくり歩きました。姫君は医者の横ではなく、少し後ろを歩きます。庭には小鳥のさえずりや木々の騒めきで満たされましたが、一人の会話は殆どありませんでした。

医者はまた不安になつてきました。会話がないこともですが、目線すら合わせてもらえない事に気付いたからです。医者は姫君を気にしながらも声を掛ける切つ掛けが掴めず、微妙な雰囲気のまま花畠に着いてしました。

花畠に着くと姫君は一瞬 動きを止めたものの、すぐにしゃがみ込んで小さな白い花に見入りました。動きを止めたのは、驚いたからでしょう。どうやら氣に入ってくれた事に、医者は ほっと息をつきました。同じように姫君の近くにしゃがみ込みます。花を見ていたはずの姫君は 隣に医者が来ると、距離をとるようになり気なく横に移動しました。

医者はその姫君の何気ない行動に、強い衝撃を受けました。近付かれるのも嫌なのだ、と思ったのです。やっぱり自分は何かしてしまったのか、と医者は焦りました。けれど考えれば考える程、何をしたのか分からなくなってしまいます。

暫くして 覚悟を決めた医者は、おもむろに口を開きました。

『……姫様、私はいつたい何をしてしまったのですか？ 不甲斐ないのですが、どれだけ考へても分からぬのです。どうかこの愚か者に、何がいけなかつたか 教えていただけないでしょうか？』

姫君は驚いて、医者の方を振り返りました。医者は不安げに姫君を見つめています。自分の事で手一杯だつた姫君は、医者がそんな風に考へていたとは全く思つていませんでした。

自分の態度で医者を誤解させてしまった事に、姫君はひどく慌てました。といつても 傍目には冷静そのもので顔色も変わらなかつた為、医者の不安は更に募りました。

姫君としては、目を合わせるのが恥ずかしかつただけなのです。医者にそれは誤解なのだと伝えたいのですが、上手く言葉にすることができません。姫君は更に焦り、焦りすぎて頭が真っ白になつてしましました。

『いえ……先生は、何も……』

それだけ言うのが精一杯で、後は唇を噛み締め俯いてしまいました。姫君の手の中では、可憐な白い花がさやさやと風にそよいでいます。

しばらく経つても姫君から もう何の言葉もない事に、医者は姫君の気持ちを理解しました。姫君の本当の気持ちとは逆の意味に。医者は静かに立ち上りました。

それを見た姫君は、とつたに医者の服をつかんでしまいました。

それは無意識の行動でしたが、姫君はどうしてそんな事をしたのか分かつてしましました。どこにも行かないで欲しい、少しでも傍に居てほしい と思つたのです。

それと同時に、何故 医者と田線を合わせる事が出来なつたのか、少しでも触れると体がびくついてしまつたのか……その本当の理由も。それは、さつきの行動と一つの線で繋がる感情でした。

医者は引き止められた事に少し驚きましたが、姫君の気持ちを察し 再び隣にしゃがみ込みました。そして、子供をあやすように、心配いらないよ とでも言つたのに、姫君の頭を数回 優しく撫でました。

姫君は嬉しいような泣きたいような、何だか胸が締め付けられる
切ない気持ちになりました。その気持ちに背中を押され、姫君はつ
い 口を開いていました。

『先生……あの、私……』

医者は不思議そうに子首を傾げて姫君を見つめています。姫君はその眼差しに、心臓が破裂しそうな位 脈打っているのが感じられました。

姫君は一度目を瞑り、気持ちを落ち着かせようとしましたが、その鼓動は治まりません。余計に激しさ、苦しさが増すばかりです。この苦しさは、言葉にすれば治まるのかもしれない。そう思つた姫君は、思い切つて医者と向かい合いました。

『あの、私は先生の事がすき、なんですか』

姫君に表情はありませんでしたが、頬がうつすらと桃色に染まつていました。医者は突然の姫君の行動に、大きく目を瞬かせました。姫君はすぐに自分の出した言葉を後悔しました。どう考へても医者が自分を好きになる訳がないし、告白されても迷惑なだけだと気付いたからです。姫君は慌てて言い繕いました。

『あああのーす、すみません。

そんなこと言われても『迷惑、ですよね。私と付き合つだなんて、そんな夢みたいな……あ、いえ付き合つとか考えていた訳では』

もう姫君自身にも何を言つていいのか分からなくなつてきました。焦つて いるせいで、上手く言葉を紡ぐことができません。それどころか変な事を言つてしまい、姫君は自分のあまりの情けなさに泣きそうになりました。あまりにも恥ずかしくて、顔を手で隠し膝に寄せて見えないように屈みこみました。

姫君の慌て振りで逆に落ち着いた医者は、そんな姫君の頭を再び数回 優しく撫でました。その手は穏やかで温かいものでした。

その手に勇気付けられ、姫君は恐る恐る顔を上げます。そこにはとても柔らかく、慈しむように微笑んでいる医者の顔がありました。

姫君と田が合つと 医者の微笑みは更に深くなりました。

『迷惑だなんてとんでもない。とても嬉しく思います。私のような者を好いてくださいって ありがとうございます』

それは告白の返事とは違つていましたが、姫君は拒絕されなかつただけで充分でした。頬を朱に染めたまま、ぎこちなく首を振ります。でもやっぱり目を合わせてるのは恥ずかしくて、花畠の方に顔を向けました。目の前には、花弁が白くて 中心が黄色い花が風にそよいでいました。

医者は隣で静かに、姫君が花を愛でているのを見つめっていました。その顔は先程までの不安は見当たらず、とても穏やかなものでした。一人はその日、辺りが薄暗くなるまで花畠に座り込んでいました。会話もなくただ静かに、けれど温かな空氣の中で。

この頃から姫君は切実に、笑えるようになりたい と思うようになります。今でもその思いはあつたのですが、更に強く思うようになつたのです。それは医者の事が多分に関係していました。

自分の為にあんなに頑張つてくれている医者に 笑顔を見せたい という思いもありました。けれどその事よりも、期限のことが姫君に重く申し掛かっていました。五年が経過しても自分が笑えない時、医者は処刑されてしまつのです。

姫君はその事実に恐怖しました。医者が姫君の治療を始めてから、もうすでに四年以上もの月日が流れていたのです。残りはもう一年ありません。

姫君はそれこそ寝る間も惜しんで治療に励みました。助手は何も口出しせず手伝っていました。止めることも、進んで手伝うこともありません。ただ言われた事を言われたままに熟していました。

その無理のある生活に、姫君は少しづつ体を壊していました。その主たるは睡眠不足によるものでしたが、医者への気掛かりもその一因でした。

当然の事ながら、医者は姫君の異変に気付きました。診察しているのですから気付かないわけがありません。医者は診察の後、姫君にそれとなく理由を尋ねる事にしました。

『姫様、最近調子が悪いようですが……何かあつたのですか?』

姫君は答える事ができませんでした。姫君は、自分のせいで医者が死んでしまう事は分かっているのに、それでも笑えない自分に憤りを感じていました。

けれどその事を医者に言つてはいけないと姫君は思いました。例え話したとしても、医者にはどうする事もできないうじょう。これは姫君自身の問題なのです。それに、毎日自分の為に頑張ってくれている医者に言つのは憚はばかられました。

『特にこれといって……何もありません』

姫君はやうやく答えていました。

『姫様、私はそんなに頼りないのでしょうか……？ お願ひですか
ら 姫様の悩みを私にも分けてくださいませんか？』

一言呴いた後 硬く口を開ぎしてしまった姫君を、医者は真摯な
眼差しで見つめました。姫君は長い時間 無言で通しましたが、医者
の根気強く直向きな態度に負け、理由を話してしまいました。
それを聞いた医者は哀しげに眉を潜めます。

『姫様。私は処刑されることを承知の上で ここに居るのであります。で
すから、そんな無理をなさらないで下さい。今に倒れてしまわれま
す』

そう医者に言われても、姫君は聞き入れる事ができません。何故
だか、落ち着き払っている医者に 理不尽にも怒りを感じてしまい
ました。自分の事よりも、姫君を心配する医者に。

『例え先生がその事を受け入れていたとしても、私には到底 耐え
きれないのです……。それに先生としても 私は笑えた方がよろし
いのでしょうか？』

医者は戸惑つたように田線を彷徨わせると、顔を伏せました。姫
君は じつと見つめて答えを待っています。医者は言いくそそうに、
言葉を濁らせながらも答えました。

『……私は……。姫様が『自分で笑いたいと思われ、努力なさ
るのは良い事だと思います。……けれど、無理をしてまで頑張つて

いただきたくないのです。それが私の為といつになら尚更……』

顔を上げた医者は姫君の両肩に手を乗せ、田線をしつかり合わせました。突然の事に驚いた姫君は思わず身を退こうとしました。けれど思いの外 肩を掴む力が強かつたのと、医者の瞳が 真剣な眼差しをしていたのを見て止まりました。

『私は……貴女の、その微笑むことができず その為に悩み傷ついて……。それでも尚 人を責めない、責める事ができない貴女に惹かれたのです』

医者は壊れ物でも扱うかのように、姫君をそつと抱き締めました。まるで姫君の全てを……全ての傷を包み込んで癒すかのように。

『貴方の……事が、好きです。貴女が弱つていいくのをみていたらしいのです。……お願いですから、無茶な事はなさらないで下さい』

医者はついにその言葉を言つてしましました。今まで身分の差や、色々な理由で言えなかつた事を。姫君の衰弱には目に余るものがあり、言わざにはおれなかつたのです。

けれど医者はすぐに、その胸から姫君を離しました。良くも悪くも、医者は医者でしか有り得なかつたのです。すぐに自分の衝動を押さえ込み、冷静さを取り戻しました。

『申し訳ございません、身分もわきまえず大変失礼な事を。どうか……今、 言つたことはお忘れいただきたく……お願い致します』

それだけ言って頭を下げるが、医者は田線を上げることもなく静かに部屋を出て行きました。

一人部屋に取り残された姫君は、茫然と立ちつくしていました。
信じられない思いでした。まさか医者が自分を……とは夢にも思わ
なかつたのです。

けれど 抱きしめられた感覚は夢では有り得ません。姫君は夢を
見ているような、地に足が付かない ふわふわとした状態でしばら
くその場に佇んでいました。

その光景を誰かに見られていたとは全く思わずに 。

その夜。姫君は今日起こつたことを思い出していました。まだ浮かんでいるかのように、ふわふわと夢見心地です。

その部屋に 音もなく入つてくる人影がありました。姫君に気付かれないよう、静かに歩みを進めていきます。その足取りに迷いはなく、部屋の構造を熟知しているようでした。家具を巧みに利用して姫君に見えないように近づいていきました。

ある程度近づくと 人影は家具から身を乗り出し、姫君の様子を窺いました。姫君はぼんやりと空中に視線を彷徨わせていて、気付いた様子はありません。人影は刺し殺さんばかりの視線を姫君に向けると、懐から小振りの短刀を取り出し 握りしめました。

家具の影から人影が飛び出し、白刃を閃かせ襲い掛かつた瞬間、姫君はその人影に気付き、驚いて身動きました。それが幸いして、間一髪その刃を避けることができました。ついてこれなかつた髪が一房、床に渴いた音をたて落ちます。

後ろを振り向いた姫君は、目を見開きました。そこには物凄い形相をした助手が、姫君を睨んでいたからです。

『何であなたが……何で、あなたなんかが先生と！ 私から親を奪つただけでなく、先生も奪うつもりなの！？』

助手は涙を流しながら叫びます。その顔は鬼の様に恐ろしく、でも悲痛な面持ちで歪んでいました。いつもの物静かで清楚な雰囲気はどこにも見当たりません。

姫君は悲鳴を上げ、逃げ出そうとしましたが、それを助手が許すはずもありませんでした。すぐに引き戻され、床に押し倒されてしまします。容赦なく床に叩きつけられた姫君は、あまりの痛みに息を詰まらせ、体を縮こまらせました。助手はそんな姫君を、憎々しげに見据えていました。

『あんたが笑えないせいで、私の親は殺されたのに……多くの人が達が亡くなつたのに……それを忘れて、幸せになるなんて許せない……』

血を吐くような助手の言葉は、姫君の胸を抉りだしました。姫君はもう声も出せず、カタカタ震えています。助手は姫君を押さえたまま、ゆっくりと鈍く光る刃を振り上げました。姫君はその今にも振り下ろされるであろう短刀を、ただ見つめていることしかできませんでした。

辺りは急に静寂に包み込まれ、姫君のとも、助手のとも分からな荒い呼気だけが部屋に満ちていきました。姫君を睨み据えていた助手の手がぴくり、と微かに動き……

『止めるんだ…… そんな事をしてどうなるー?』

今まさに、刃が振り下ろされそうになつた時、男の声が静寂を切り裂きました。それは医者でした。普段とは違い、かなり焦つている口調です。医者はこの光景を見て、一瞬で状況を悟つたようでした。

助手は医者の登場に動搖し、一瞬ためらいましたが、もうやめることはできませんでした。止まっていた手に力を込め直して、ためらつ心を断ち切り、短刀を思い切り振り下ろしました。

短刀は深々と刺さりました。

医者の 背中に。

短刀が振り下ろされる直前、医者は助手と姫君の間に割り入ったのです。

一瞬後、医者は姫君に覆い被るように倒れました。その拍子に背中に刺さっていたナイフが抜け、助手の手からこぼれ落ちました。医者の背中からは とめどなく血が溢れ出ています。

助手は呆然と口の手を見て 立ち去りました。姫君は医者に押し倒されたまま床に座り込み、身動くこともできませんでした。その体は、医者の血で徐々に赤く染められていきます。

その場は時が凍りついたかのよう、静まり返りました。誰も身動きしません…… できませんでした。

しばらくすると、幾人かの足音が部屋に向かってきました。姫君の悲鳴を聞いた衛兵が駆け付けたのでしょう。

部屋に踏み入った衛兵達は、この惨状に何事かと目を見張りました。姫君の上には血塗れの男が覆いかぶさり、その前では、女が茫

然と立ち尽くしていたからです。女の足元には、男と同じく血塗れた短刀が転がっていました。

位置関係から、ひづやら女が短刀を振るつたと推測した衛兵達は、女 助手を縛り上げました。自ら愛する人を刺してしまい 茫然と自失となつていた助手は、ただされるがままに縛り上げられ 連行されていました。

残つた衛兵に声をかけられ、姫君はやつと我に返りました。目の前の血塗れで びくりとも動かない医者を見て、甲高い悲鳴をあげます。医者の背中からは、未だに血が流れ出していました。
衛兵は 悲鳴をあげ泣きじゃくつている姫君を痛ましげに見ると、すぐに侍医を呼びに行きました。

姫君の呼び掛けにも、医者は全く動く気配を見せませんでした。医者の体は、生きているとは思えない程 ひんやりしていました。姫君は背筋に戦慄^{せんりつ}が走ります。このまま医者がいなくなつてしまふような気がしたのです。姫君は医者の手を握りしめ 名前を呼び続けました。その顔に表情はありませんでしたが、その瞳からは大粒の涙がこぼれ落ちていました。

医者を診察した侍医は、とても危険な状態だと思いました。動脈を傷つけたせいで血が流れ過ぎてしまつてしているのです、と。そして今夜が山場だとも言いました。

姫君は心配で居ても立つてもいられませんでした。けれど侍医の気を散させてはいけない、と 部屋には入りませんでした。その代わり扉の前に跪き^{ひざます} 神に祈りました。

お願いです神様！ あの人を連れていかないでくださいーー！

姫君はその瞳に涙を湛え、一心不乱に願います。顔は血の気が引き、手は握り締め過ぎて青白くなっています。頬にはとめどなく涙がこぼれ落ちています。

姫君を心配した家臣達は、部屋でお休みになるよう進言しましたが、姫君は頑として聞き入れませんでした。それに部屋に戻つたとしても、姫君は眠りにつく事などできませんでした。

姫君はまんじりともせず、そのまま朝を迎えました。

朝日が差込み、鳥のさえずりが聞こえてきた頃、部屋の扉がゆつくり開かれました。そこから憔悴した顔の侍医が、ふらつきながら出てきました。扉の前に跪いている姫君を見つけ、驚いて目を大きく開きます。

医者の安否を尋ねようとした姫君は、あまりにも寝れている侍医に不安をいだきました。勢い込んで口を開いたものの、怖くて尋ねる事ができません。侍医はそんな姫君を静かに見つめると、少し身を退いて部屋に招き入れました。

部屋の中は、早朝の冷たい空氣に満たされ、しんと静まり返っていました。部屋の奥には、医者が横たわっている寝台があります。けれど姫君は、もしかしたら……という思いがあり、中々近づく事ができません。

その時、寝台の方で微かに物音がしました。姫君は震える膝を抑え、思い切って寝台に駆け付けます。そこには、未だ青ざめ憔悴しきっているものの、確かに生きていると分かる医者がいました。

『申し訳、ありませんでした……』

医者は苦しそうに謝りました。きっと、助手がしどとじた事を言つていいのでしょ？

姫君は無言で首を振ります。何か言おうとしても、喉がつまつて言葉にすることができなかつたのです。姫君は涙を流していました。でもそれは昨夜までのとは違い、嬉しい歓喜の涙でした。

姫君は神に感謝しました。どれだけ感謝しても足りないくらいです。侍医の様子からも、医者は幻覚ではなく確かに生きていると分かりました。

姫君は心から安堵しました。そして微かに、ほんの微かに……

微笑んだのです。

それはまるで華が綻^{ほころ}ぶような 春の暖かな日差しのような、とても温かで優しげな微笑みでした。看病で憔悴していた侍医でさえ、その疲れを忘れ姫君の微笑みに見とれてしまいました。

けれど医者は、それどころではありませんでした。青白い顔をより一層 靑^{せい}やめさせ、掠れた声で願い出ました。

『……申し訳ございません。まだ体調が万全ではないので、今日の所は休ませて頂いてもよろしいでしょうか……？』

姫君はその言葉に慌てて承諾を返しました。確かに病み上がりに無理をさせでは、また危険な状態になりかねません。医者は当分、ゆっくり休んだ方がよいでしょう。姫君はそこまで気が回らなかつた自分を恥ずかしく思い、部屋に戻る事にしました。

姫君は昨日寝ていなかつたのと医者が生きていた事への安堵で、寝台に入るなりすぐ眠りに落ちていきました。

次の日、昼前に目覚めた姫君は、助手が処刑されていた事を知りました。姫君の命を狙つた者を王様が放つておく筈はないのですから

ら、当然といえば当然の結果です。

それでも、姫君の胸は痛みました。助手の悲痛な叫びが耳を離れないのです。

自分がいなければ、あの人の運命は違うものになっていたのだろう、きっと幸せな一生を過ごしたのだろう……。

姫君は そう考え、自分が疫病神のように思えて仕方ありませんでした。

そんな姫君の沈んだ気持ちとは裏腹に、王様はとても上機嫌でした。なにしろ長年願い続けていた姫君の笑顔が出たのですから。その喜びようは凄いものでした。

王様はすぐに姫君を呼び寄せ、笑顔を請いました。姫君はぎこちなくはあるものの、父である王様に向かつて微笑みました。

姫君の笑顔は本当に些細なものでしたが、今まで全く表情がなかつたのですから 大した進歩だと言えました。王様は感涙にむせびながら、何度も何度も姫君の頬を撫でます。その顔は普段とは異なり、慈愛に満ちた優しいものでした。

王さまは心から、医者に 姫君の命を守り、この偉業を成し遂げた男に感謝しました。

王様は盛大な祝いの席を設けることにしました。そして、その場で医者に褒美をとらす事を皆に言い渡しました。

その席は事件から数日後、医者の体調がある程度 良くなつた時に執り行われました。

王様は上機嫌で玉座についていて、その隣には姫君が座つていました。姫君の雰囲気はとても柔らかいものに感じられました。それは ぎこちなくはあるものの、顔に表情が出ていたからかもしれません。

王様は田の前で跪いている医者に尋ねました。

『そなたは感謝しても足りない事を遣り遂げてくれた。私ができ

る事ならなんでもしよう。どのよつた褒美がよいのだ?』

医者は頭を垂れたまま、静かに述べました。

『……はい、王様。ただ一つだけ、私には願うものがあります。けれど皆の前では気不味いので、近くで言わせていただいても宜しいでしょうか?』

王様はその申し出を快く承諾しました。許可をもらつた医者は、じとじと王様に近付いていきます。体調がまだ完全に良くなつていなかかもしれません。皆が期待して見守る中、医者は王様に耳打ちしました。

『王様、私が希う物は……』

『貴方様の命でござります』

言いつと同時に、王様の胸に短刀を突き立てました。王様は驚いた顔のまま、ゆっくりと横に倒れていきました。姫君は目を見開き、信じられない思いで隣を見ていました。

瞬く間に広間は喧騒に包み込まれました。悲鳴を上げる者、逃げ出す者で騒然となります。

衛兵はすぐに医者を取り押さえようとしたしました。けれどそれより

早く、医者は隣に座っていた姫君を捕らえました。姫君は何が起つたのか理解しようにも頭がついていかず、ただ されるがままになっていました。姫君の首筋に短刀を突き付け、医者は言います。

『姫を殺されたくなければ武器を収めて下さい。私が無事 逃げ切れたならば、ちゃんとお返ししましょう』

王様が倒れてしまつた今、この国の王位を継承するのは姫君しかいないのです。衛兵達は手も足も出すことができん。歯ぎしりをしながら、医者達を見送ることしかできませんでした。

医者は衛兵達がついていないうことを確認すると、姫君を残す場所に向かいました。誰にも見つからず、それでいて城から離れすぎていない場所 あの花畠に。

野原に着くと、そこでやつと姫君を離しました。姫君は力無く座り込みます。その顔は血の氣を失い青ざめています。

姫君は顔をあげることすら出来ず、けれど震える声で尋ねました。

『……………父上を…』

医者は冷たい目で姫君を見下ろしていました。姫君は俯いていた為、それに気付くことはありませんでした。医者は姫君から田線をそらすと呟きます。

『さう、ですね。貴女には知る権利がある……お話ししましょう』

そして医者は語り出しました。淡々と、驚くほど冷えきった聲音で。

『九年程前……貴女は覚えておいででしょうか。五年間 治療を施した医師が処刑されましたでしょ？ それこそ、私の父でした。……これで、お分かりですか？』

その言葉に思わず顔をあげた姫君は、医者が薄く笑うのを見ました。けれど田は全く笑っておらず、冷えきったままでした。
姫君は背筋が凍りつきました。今までそれほど冷たい田で見られた事がなかったのです。

『処刑が前日に迫った田、両親は私を女装させ逃がしたのです。その日から一日たりとも、この国を忘れたことはありませんでした。父と母を殺した、無情な王が居る この国を……』

医者の言葉に感情の起伏はなく、淡々としたものでした。けれどそれが逆に、怒りを深く秘めていたように感じられました。

『本当に、王様が変わつておられたら止めるつもりだったのですが……今も昔もお変わりなく、とはね』

医者は吐き捨てるように呟くと、冷笑しました。姫君の顔色はもう青ざめを通り越し、血の気が感じられない程 白くなっています。そして消え入りそつた声で呟きます。

『 それでは 私、に優しくしてくれた のは 』

『 もちろん王様に取り入る為です。笑わせるのは無理だと思つていましたし、王様は貴女には甘い方ですからね。……でなければ無表情な華氷姫などに、誰が近付くものですか』

姫君の淡い思いは、無残にも引き裂かれました。医者の言葉は姫君の心をえぐり出します。姫君は ただ、はらはらと涙を零すことができませんでした。その顔からは戻りかけていた表情が消え失せていました。

医者は淡々と続けます。

『 けれど、貴女には私を殺す権利があります。私にとつて憎い仇かたきであつても、貴女には掛け替えのない肉親かたきだつたのですから』

医者は先程まで突き付けていた、王様の血で赤く染まつている短刀を姫君の前にそつと置きました。

『 さあ……、今なら簡単に仇が打てますよ』

医者は無防備に姫君の前に跪きました。その様子に嘘偽りはなく、本当にそう思つていいようでした。

けれど姫君は短刀を手にしませんでした。とめどもなく涙を零し、

ただ 弱々しく首を振つていました。

例え裏切られても 父親が殺されても、姫君に医者を殺すことはできなかつたのです。

医者はじばらぐそのまままでいましたが、姫君に動く気配がないのをみると、静かに立ち上がりました。

『……そうですか。貴女にその気がないのでしたら、私はこれで失礼させていただきます』

医者は姫君を一警すると、背を向け立ち去ろうとしました。そして一步踏み出した瞬間、背中に鋭い衝撃が走り、何か熱いものが溢れていく感覚がありました。医者は立つていられずその場に膝をつき、前のめりに倒れ込みました。

倒れ込んだ医者の後ろに、姫君が短刀を手に佇んでいました。無表情のまま、涙をはらはら零しながら。

姫君は医者になら、罵倒されようが暴力を振るわれようが、それこそ殺されようが、どうでもよかつたのです。

ただ、傍らから居なくなるのには耐えられなかつた。居なくなるならば、殺していつて欲しかつたのです。

医者は白い花に抱かれるように倒れています。その表情はどうか満たされたような、とても穏やかで優しげなものでした。

けれど、姫君が医者の表情に気付くことはありませんでした。血に濡れた短刀を手に、静かに立ち尽くしていました。頬を涙で濡らしながら、髪を風になびくままにして。

そんな姫君の周りで白い小さな花は、ただ わやわやと風に揺られていました。医者と姫君、一人が仲睦まじく座り込んでいたあの頃と同じ様に。

白い花は変わらずそのままに。わやわやと穏やかに 。

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました（ ）
 この話は、私が文章を書き始めて、初めて小説『りじく』出来たのを手
 直ししていったものです。
 書いたのは一年半位前ですね。

某所で一度 投稿（一年半前）したのですが、今見るとかなり直す
 場所があつてびっくりでした（×××；）
 あの頃は自分の力いっぽいに書いていたのに、今みると色々ダメダメ
 すぎますね（・へーへーA）

数年後に見た時には、また直す所が山ほどあるのでしょう。
 ……それは、少しずつでも上達していると思つていいのかなあ？；
 だったら良いのですけど（へへー；）

題名について

『華氷』

“中に花を入れて凍らせた氷の柱”の事です。
 意味は華＝姫君、表情がない＝氷、でそのまんまですね。
 氷が溶けたら、華が咲くとかそんな意味も含んでます。

『Marguerite』

“マルガリータ”と読み、お花のマーガレットの事です。
 作中に出でている花は、これの事です。
 “心に秘めた愛”という花言葉があります。

そういう場面に出てる、と考えていただければ 話の解釈（？）が
しやすいかもしません。

因みに、助手は始めの方に出てきた大臣の娘です。

それと、王様はこの話では色々やらかしますが、一応それにも理由……というか、原因があつたりします（^_^；
ここに書いてもいいのですが、ネタとして取つておこうかと。（え）
番外編とかで書けたらいいな、とか。（書けるかは分かりませんが；
）

それでは、この辺りで。

この作品で、皆様が少しでも楽しい時を過ごしていただけたなら幸
いです^^(、^*^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9517c/>

華氷姫～Marguerite～

2010年10月10日07時00分発行